

令和6年度 新潟小学校教育活動の方針

子どもは、楽しく動き、楽しく学ぶもので、元来、笑顔がたくさん見られる存在である。新潟小学校にも毎日、多くの子どもの笑顔が見られる。それは、自然な姿ではあるが、最も大切にしてい
くべきことである。そして、子どもの笑顔が、いっぱいになり、そのことにより保護者や地域に笑
顔が広がっていく、そんな学校を「えがおあふれる学校」として目指してきた。

令和4年度から「えがおあふれる学校」を目指して教育活動を進めてきた、その過程で、生徒指
導的な問題が多数発生することと、その解決に多くの時間や労力が費やされていることが、課題と
して明らかになった。子どもが困っていて、保護者が心配していて、それを解決するべく職員が奔
走している学校は、ほかにどれほどの笑顔があろうとも、笑顔があふれているとは言えない。

そこで、5年度は、生徒指導的な問題への速やかでチームによる対応に全力を上げてきた。それ
により、一つの問題を解決するまでの時間は、減少しつつある。

本年度は、生徒指導的な問題への対応については、5年度の体制を継続しつつ、子どもが楽しく
動き、楽しく学ぶ姿をより多く発揮できるように教育活動の改善も進めていく。それにより、生徒
指導的な問題の発生も減少することを期待する。本年度も、「えがおあふれる学校」を目指してい
く。

1 教育目標

教育目標は、令和2年度から継続している「たくましく 美しく」である。

「たくましく」は、当校児童に必要とされた資質・能力として浮き彫りとなった「挑む力」「やり
抜く力」を、「美しく」は「認め合う心」「支え合う心」を表している。これら4つの資質・能
力の具体は以下の通りである。

「挑む力」 …困難なことにも果敢に挑戦する力

「やり抜く力」 …とことん追求し学びを生かす力

「認め合う心」 …性別・身体・国籍・考え方などの違いを大切にして他者を思いやる心

「支え合う心」 …献身性を大切に多様な他者と協力する心

この4つの資質・能力が高まるよう、教育活動を推進していく。主な教育活動には、この資質・
能力の一つ以上を高めることを目指すよう関連付けるものとする。

2 「新潟小学校教育活動の方針」一つの土台と三つの柱

教育目標を達成し、目指す学校像「えがおあふれる学校」を実現するために一つの土台と三つの
柱を定める。

(1) 教育活動の土台

学校は、多くの子どもが一斉に活動し、学習する場所であり、このことに起因して生徒指導的な問題が起きる可能性がある。新潟小学校におけるこれまでの経緯から、生徒指導的な問題が発生した場合は、子どもが安心して学校生活を送ることができるように、速やかにチームで対応することを継続する。一つの生徒指導的な問題を長期化させない、深刻化させない、複雑化させないことを第一に職員の総力を挙げて取り組むことを教育活動の土台とする。まずは、聞き取りを行うなど事実の把握に努め、職員が情報を速やかに共有し、適切に支援や指導を行う。

その際、再発防止を含め、子どもの生きる力を高めるために自らに向き合えるよう、考えさせる支援や指導を大切にする。問題の解決場面であっても、子どもの学びを大切にしていきたい。これにより、以後における問題回避や自力解決を導いていきたい。

(2) 教育活動の柱

① 個別最適な学び

子ども一人一人、関心のある学びは違い、得意不得意も違う。当然、一人一人に合った支援や指導も違ってくる。一人一人の違いをある程度、分類して授業を構成することは、これまでも行われてきた。さらにそれらを発展させ、その子どもに最も適した学びを提供できれば、その学びは深まり、満足感や充実感を十分に感じることができる。また、一斉の学びでは能力を発揮しきれない子どもにとって、より学ぶ意味を感じられると言える。

また、個別最適な学びは、子ども自身が自らの学習を自立的に進める姿を大切にしている。自らの学習を自らが求め、それに向けて取り組み、努力する姿は、新潟小学校が高めようとしている「挑む力」「やり抜く力」が発揮されている姿である。

個別最適な学びは、その内容や方法など工夫の範囲は広く、取り組みの先行研究を探るなど、計画的に進めていく方が成果も大きいと考えられる。加えて、タブレット端末は、個別最適な学びにおいて重要な位置を占めるため、より適切で有効な利活用の方法について検討を進めていく。

さらに、6月22日に行われる、日本生活科・総合的な学習教育学会の授業公開校として取り組みを進める。

〈取り組みの具体例〉

- ・個別最適な学びに関する先行研究や先行実践の収集と理解及び研究計画の立案
- ・個別最適な学びの実践
- ・タブレット端末の適切な活用の推進

② 協働的な活動

子ども同士の関わりを広げ、深めることは、子どもの社会的なスキルの向上にとどまらず、自己肯定感の向上や思いやりや寛容性を高めることが期待できる。最終的には子ども同士の関係づくり

を醸成していくことを目指して、協働的な活動を充実させる。そこには、新潟小学校が高めようとしている「支え合う心」が深まっている姿が見られることが期待できる。

その際、自らが所属している集団を向上させる姿勢も大切にしたい。例えば、学級力向上の活動では、自らの学級の長所や短所を把握し、学級集団の向上を目指して取り組みを進める。また、特に高学年においては、こんな学校にしたいという願いを話し合い、そのために自らできることを考え、友達と協働的に取り組み、その取り組みで学校が変わったことを実感させたい。これらはいずれも、新潟小学校が高めようとしている「挑む力」「やり抜く力」が発揮されている姿である。

〈取り組みの具体例〉

- ・委員会活動の充実
- ・異学年交流「たんぼぼ班」活動の充実
- ・異学年交流「ペア学年」活動の実施

③ 適切な支援

子どもは、一人一人多様な個性をもっている。その個性に適した支援によって、子どもは大きな成果を上げることができる。集団において個別最適な学びを大切にするとともに、個別の支援を必要としている子どもには、その個性に適した支援を届けていく。

十分に、また効果的に適切な支援を届ける場として、特別支援学級がある。新潟小学校の三つの特別支援学級においては、それぞれの個性に応じ、必要とされている支援を行っていく。同時に、どの学級の子どものもそれぞれに個性があり、場合によっては個別に適切な支援を届ける必要がある。例えば、人とのかかわりに課題がある子どもには、ソーシャルスキルを培う支援を行う。そのために、可能な限り、環境整備と支援の体制を充実させていく。また、早期の支援を行うと同時に、計画的な就学支援にも力を入れていく。

適切な支援を必要としている子どもが、適切にその支援を受けるためには、周囲にいる人々の理解も重要となる。子ども自身が、他者の多様な個性を肯定的に理解し、互いに尊重することで、一人一人の個性が生かされるようになる。この姿は、新潟小学校が高めようとしている「認め合う心」が深まっている姿でもある。また、保護者との情報共有、支援方針の合意形成を推し進めるべくコミュニケーションをこれまで以上に大切にするとともに、特別支援教育を理解してもらう努力を進める。

〈取り組みの具体例〉

- ・リソースルームの活用
- ・ソーシャルスキルの個別支援
- ・適切な支援に関する保護者や児童への啓発

3 「新潟小学校教育活動の方針」実施の基盤となる取り組み

(1) 地域と協力して教育活動を進める

新潟小学校は、その校区に歴史ある新潟市の中心地を抱え、その文化の継承を担うとともに、地域の様々な素材を学びに生かしていく。それにより、郷土や地域への愛情を深めていきたい。特に、新潟まつり等への参加や地域の商店街や施設、人とのつながりの中から教育活動を進めていく。また、コミュニティ・スクールの学校運営協議会を通して地域との協力関係を一層強化していく。

(2) ボランティアの協力を得る

新潟小学校は、以前から、保護者や地域のボランティアに支えられてきた。教育活動をより充実させるためには、今後もボランティアの力が必要である。そこで、これまでのボランティアの在り方にこだわらず、様々なボランティアの在り方を検討し、試みていく。

(3) 保護者との連携協力、考え方の共有

子ども一人一人の健やかな成長には、保護者との考え方の共有がより必要となっている。学校と保護者が同じ方向で子どもにかかわることで、子どもが抱える様々な問題を解決に向けることができる。職員と保護者とのコミュニケーションが一層重要性を増している。

(4) 中学校との連携

中一ギャップの解消など、諸課題の解決に向けて小学校と中学校との連携が不可欠である。寄居中学校とは、これまでも職員の合同研修や新潟まつりへの参加など、様々な場面で連携してきた。現在、義務教育9年間の学びを通した目指す生徒像を「よりよい自己と社会の実現に向けて共に挑む子ども」として共有している。今後も、「一小一中」の良さを生かして連携を進めていく。

(5) 働き方改革と職務遂行の向上

学校が直面する課題の複雑化・多様化を背景に、職員の多忙化がクローズアップされている。余裕をもって子どもと向き合う時間の確保や質の高い教育活動を行っていくためにも、職員の働き方を改善することが求められている。改善を進める上での重要な視点として、職員が授業や教育活動の計画・準備を確実にこなせるよう時間的に保障することと、職員が研修を十分に受けることで、その資質・能力を向上させることが大切である。